

## ゲール語の諸特徴と類型

—スコットランド・ゲール語における音声的特徴と形態統語的特徴を中心として—

本 城 二 郎

### 1. 序論 (スコットランド・ゲール語の概要)

スコットランド・ゲール語<sup>\*1</sup>は、ケルト語派の中でもアイルランド語、マン島語とともに島嶼ケルト語中のゴイデリック諸語を構成し、(スペインの)イベロ・ケルト語とともに Q ケルト語的特徴を有する。5 世紀後半にアイルランドから渡来したダールリアダ王朝のスコット人 (=MLat.アイルランド人) の言語が起源とされ、古期アイルランド語から分岐し、ブリテン島の他の言語 (古くは先住民の古ブリソニック語や後の英語) との接触のもと、独自の発達を遂げたと考えられる。それは、音声的特徴や形態統語的特徴における独自の変化に顕著である。前者における鼻音化の強化、後者における形態変化の単純化、分析的アスペクト形式の発生、VSO 語順の文法化その他である。本論では、現代アイルランド語や英語との比較も適宜交え、ゴイデリック諸語の中でも分析化への傾向を示すスコットランド・ゲール語の諸特徴理解に迫る。ケルト言語学の中でも比較的マイナーな分野とされるゲール語研究への一貢献となれば幸いである。

### 2. ケルト語の諸特徴

#### 2. 1. 共通ゲール語全体の共有特徴

アイルランド語、スコットランド・ゲール語 (、マン島語) が分化する前の 13 世紀頃までには、一種のゲール語共同体が形成されていて、その後、各言語に個別変化があったものの、現在でも、緩音化 (Lenition: レニション)、鼻音化 (Nasalization)、口蓋音化 (Palatalization) あるいは軟音化あるいは音交替 (Mutation)、語頭定アクセント位置、“habere” (持つ) 動詞の不在と “esse” 動詞+前置詞句による所有構文、動詞文頭位置 (VSO 語順) など多くの言語的共有特徴が見られることから、これらの言語は“共通ゲール語 (Common Gaelic)” と呼ばれている (Jackson(1951)による命名)。

#### 2. 2. スコットランド・ゲール語の諸特徴

共通ゲール語との比較から、全体的に分析化への傾向が見られる。以下に、音声的特徴における音韻化と形態統語的特徴における分析化を中心に特徴の抽出を試みる。

##### 2. 2. 1. 音声的特徴

以下の 3 つ、すなわち語中音脱落と子音変異 (緩音化/鼻音化/口蓋音化) と母音交替

が (スコットランド・) ゲール語に顕著で、多くの場合、音韻化を実現している。

i. 語末音脱落 (Apocope アポコープ) :

主に方言で頻発し、書記上の変化がなく、弱化語末音/-ə/の脱落と見なされる。

① *mise/misə/* > /mi:/ (私は/に)

ii. 語中音脱落 (Syncope シンコープ) : 音や音節の弱化による語の短縮化

Sc.Gael.では、語形変化や語派性において頻発する現象である。

② *fosgail* (開ける/現在形=2sg.命令形) > *fosglaidh* (開けるでしょう/未来形)

-gail->-gl+未来形語尾

③ *lughad* (小ささ/名詞) > *lùghdaich* (減少する/動詞)

-ghad->-ghd+動詞派生語尾

iii. 子音変異と母音変異 :

子音変異には緩音化/鼻音化/口蓋音化 (いずれも音韻的)、母音変異には母音交替 (音韻的) が、それぞれ観察される。

● 語頭子音変化 (Initial Mutation)

iii' . 緩音化 (Lenition : レニション) : 連声など音声環境における一種の摩擦音化

「緩音化とは、破裂音が母音に挟まれたとき、口腔内の筋肉が緩み、対応する摩擦音に変わったことをいう」(Doi(1998)p.217)。(すでに消失したものも含め) 先行母音により引き起こされ、句の接続部、すなわち語中の母音間や (かつて母音で終わった語の後にくる場合には) 語頭で生じる。(J.の所謂“連濁”との類似性?)

無気破裂音 > 有声摩擦音      有気破裂音 > 無声摩擦音

音変化 :    /p,t,t',k,k'/ > /v,y,y',y,y'/      /p<sup>h</sup>,t<sup>h</sup>,t'<sup>h</sup>,k<sup>h</sup>,k'<sup>h</sup>/ > /f,h,h,x,c/

文字表記 :    b,d,d,g,g    bh,dh,dh,gh,gh    p,t,t,c,c      ph.th,th,ch,ch

緩音化を起こす主な先行語の種類 :

+<sup>1</sup>後続名詞 : 定冠詞 (nom.sg.f./dat.sg.m.& f./gen.sg.m.a' : x v. ⑮参照) /前置詞 (+dat.: *do/fo*(~の下に)/(*bh*)*o roimh*(~の前に)/*de/mu*(~について) /+gen.: *troimh*(~を通じて)/+acc.: *gun*(~無しに)/+dat.+acc. *mar*(~のように) : x iv. ⑭参照) /voc.a (~よ!) /数詞 (*aor*(1)/*dà*(2)/*a' cheud*(1 番目の)) /被修飾名詞 (+属格名詞) /前置形容詞 (*deagh*(良い)/*seann*(古い))

+<sup>1</sup>後続形容詞 : 先行名詞 (nom.sg.f./dat.sg.m.&f./gen.sg.m.) /強調小詞 (*glé*(明らかにかに) /*ro*(とても)) /*bu* (繫辞 *is* の過去形)

+<sup>1</sup>後続動詞 : *do* (過去表示子) /*cha(n)* (否定小詞) /関係代名詞 *a*(~ところの)/複合接続詞 *nuair a*(~の時)/独立関係代名詞 *na*(~ところのもの)/接続詞 *ma*(もし~なら)

語頭音の緩音化の例 : ( Sc.Gael<sup>\*1</sup>(スコットランド・ゲール語)より)

④ *bàta/ba:ta/* (ボート)

*ràmh a' bhàta/va:ta/* (E. the oar of the boat) (ボートのオール)

na bàtaichean/ba:təçen/ (E. the boats) (ボート(pl.))

(siùil nam bàtaichean/nə ma:təçen/ (E. the sails of the boats.ボート(pl.)の帆(pl.) ☞<sup>n\*2</sup> 鼻音化の生起)

air a' bhàta/va:ta/ (E. to the boat) (ボートへ) ☞ do'n < do("to")+an : 定冠詞単数

air na bàtaichean/ba:təçen/ (E. to the boats) (ボート(pl.)へ)

a bhàta/va:tə/ (E. oh, boat!) (おお、ボートよ!)

### iii" . 鼻音化 (Nasalization) :

「先行する語または後倚辞 (proclitics) が *-n* で終わるとき、後続語の語頭音に起こった種々の変化をさす」(Doi(1998)p.218) との定義があるように、元々語末が鼻音であった語が後続語の語頭要素に与えるプロセスを指す。Sc.Gael.ではエクリップス(揺らぎ)とも呼ばれている。

音変化 : p/p/,t/t/,c/k/,f/f/ > bp/b/,dt/d/,gc/g/,bhf/v/

b/b/-,d/d/-,g/g/-,f/f/- > mb/m/-,nd/n(d)/-,ng/ŋ(g/h)/-,mh/v/-

鼻音化を起こす主な先行語の種類 :

+<sup>n\*2</sup> 後続名詞 : 定冠詞 *an/am* (nom.sg.m./gen.pl..m.& f. : x v. ⑮参照)

/前置詞(*ann*) *an/am* (～の中で/へ) /*gun*/所有代名詞 *an/am* (彼女(ら)の)

+<sup>n</sup> 後続動詞 : 疑問小詞 *an/am* (～ですか?) /接続詞 *mun/mum* (～する前に)

/*gun/gum* (～ということ) /前置詞+関係代名詞 *an/am*

語頭音の多様な鼻音化の例 : ( Sc.Gael.より))

⑤ *iar n-éire/iær ne:r'ə/* (拒んだ後に) (*iar n-<iarn-<iarm-*のプロセス)

*am balach/ə maləx/* (その少年) *nam cat/nə ŋgat/* (その猫たちの)

*an t-àite anns an cuir mi e. /sə ŋgur'/* (私がそれを置く(だろう)場所)

the place (in)to 関係辞 will put I it

### ● 語頭以外の子音/母音変化 (initial mutation)

口蓋音化と母音交替 (/ウムライト) の2種 (いずれも音韻的) が確認される。

### iv. 口蓋音化 (Palatalization) : 軟音化あるいは音交替 (i/e/u-Mutation) :

(唇音以外の) 子音 > 口蓋化音/軟音

音変化 : /t,t<sup>h</sup>,k,k<sup>h</sup>,ç,x,s,n,l,r/ > /t',t'<sup>h</sup>,k',k'<sup>h</sup>,ç',j,n',l',r'/

多様な口蓋化の例 : ( Sc.Gael.より))

⑥ *balach/paləx/* (少年/sg./が) > *balaich/paliç/* (少年の/少年達/pl./が)

*cat/k<sup>h</sup>a<sup>h</sup>t/* (猫/sg./が) > *cait/k<sup>h</sup>et'/* (猫の/猫達/pl./が) ☞ /a/~/ε/母音交替も同時生起

*glùn/glu:n'/* (膝/sg./が) > *glùne/glu:n'/* (膝の) ☞ Doi(1998), p.220 よりの引用例

### v. 母音交替 (Vocalic Mutation ミューテーション) またはウムライト (Umlaut) :

音変化 : /a/~/ε/;/i/;/a/~/i/;/a/~/ə/;/a/~/u/;/a/~/ai/;/a/~/ε/;/u/~/ə/;/au/~/ai/

多様な母音交替の例 : ( Sc.Gael.より))

- ⑦ mac/māxk/ (息子/sg./が) ~mic/miç/ (息子の) /a/~/i/  
 dubh/tuh/ (黒い) ~duibhe/təjə/ (黒い/gen.sg.f.) /u/~/ə/  
 call/kaul/ (失う) ~chail/xail'/ (失った/prét.(過去)) /au/~/ai/

## 2. 2. 2. 形態統語的特徴

(スコットランド・) ゲール語には、次の 8 種の形態統語的特徴が顕著に見られる。  
 名詞の男女 2 性、形容詞の同等級形、“esse” 動詞 *tha*+前置詞+動名詞による多様なアスペクト形式、“esse” 動詞 *tha*+屈折 (/活用) 前置詞による所有表現、“esse” 動詞 *is*+強調部分 (S/O) +関係詞 *a*+動詞による分裂文、2 種の“esse” 動詞 *tha*[存在]/*is*[繫辞]、屈折 (/活用) 前置詞、(音変化を引き起こす) 定冠詞で、以下に概観する。

### vi. 中性形の消失と男女 2 性：

印欧語から原ケルト語の段階で、すでに中性形は消失し、大半は男性形に合流した結果、男性形と女性形の 2 種 (いずれも文法性) が存在する。

### vii. 形容詞の同等級形の存在：

*Cho...rī*-名詞/*agus*-動詞 (=E. *so...as*) (~と同じくらい...) ☞ 分析タイプ

⑧ *Tha is e cho glic riutsa/cho glic agus (a tha) thusa.*

(=E. *She is as wise as you*) (彼女は、君と同じくらい賢い)

*Cho duibhe ris a'ghual* (石炭と同じくらい黒い)

cf. 比較級形：*Tha ... nas duibhe na ~/is duibhe ... na ~* (...は、~より黒い)

最上級形：*Is e ... as duibhe.* (...は、最も黒い)

他の言語の比較例：

Ir. \**-iseto/a* > ModIr. *-ithir* ☞ 総合タイプ

\**senos* (古い) → \**senisetos* (同じように古い)

Ir. *léir* (勤勉な) → *léirithir* (同じように勤勉な)

### viii. *Tha/bha* “(there) is/was” +前置詞+動名詞による多様なアスペクト形式の発達：

⑨ *Bha mi a' tighinn.* (=E. *I was coming*<lit. *I was at coming*) : 進行形 (継続)

was I at coming (私は、来つつあった)

*Bha mi air tighinn.* (=E. *I had arrived*<lit. *I was after coming*) : 完了形

was I after/on coming (私は、来ていた)

*Bha mi gu(s) tighinn.* (=E. *I was on the point of coming*

was I towards coming <lit. *I was towards coming*) : 近未来形

(私は、来ようとしていた)

*Bha mi 'nam shuidhe.* (=E. *I was sitting/seated*<lit. *I was in my sitting*)

was I in-me sitting (私は、座っていた) : 進行形 (状態)

*Bha mi 'gam bhualadh.* (=E. *I was being/getting hit*<lit. *I was at my hitting*)

was I at-me hitting : 進行形 (継続)

(私は、(自身を)打っていた/打たれていた/両義的/)

cf. **Bha mi 'ga bhualadh.** (=E. I was hitting him<lit. I was at his hitting)

was I at-him hitting (私は、彼を打っていた/一義的/) : 進行形 (継続)

**Bha mi air mo bhualadh.** (=E. I had been hit<lit. I was on/after my hitting)

was I on/after my hitting : 完了形

(私は、打たれていた)

☞ 上記7例は全て CL(1993), p.203 よりの引用例

ix. **tha**“(there) is” + 前置詞 (**aig/ag/a**“at”) + **動名詞**による進行形の例 :

⑩ **Tha e a' gabhail do bhidh.** (=E. He is taking his food

is he at taking your of food <lit. He is at taking of your food)

(彼は、貴方の食べ物を取っている)

☞ Doi(1998), p.222 よりの引用例

⑩' **Tha e a' gabhail biadh.** (=E. He is taking food<lit. He is at taking food)

is he at taking food

(彼は、食べ物を取っている)

☞ Doi(1998), p.222 よりの引用例

⑩'' **Tha mi a' dol a choimhead.** (=E. I am going to watch)

is I at: going to watching <lit. I am at its taking)

(私は、見に行こうとしている)

☞ CL(1993), p.193 よりの引用例。近未来相 “be going to”

cf. 他言語の比較例 :

S.Gael. **Bha e a' gearradh an fhedir.** (=E. He was at cutting of the grass)

(彼は、草を刈っていた)

Ir. **Bhí sé ag baint an fhéir.** (一同上一) (彼は、草を刈っていた)

W. Yr oedd ef yn **torri** r gwellt. (一同上一) ☞ Doi(1998), p.290 よりの引用例

x. **tha**“(there) is” + 前置詞 (**air** “after”) + **動名詞**による完了形の例 :

⑪ **Tha mi air a ghabhail.** (=E. I have taken it<lit. I am after taking it)

is I after it taking

☞ Doi(1998), p.222 よりの引用例

(私は、それを取り終えた)

⑪' **Tha mi air mo bhíadh a ghabhail.** (=E. I have taken my food

is I after my food to/for taking <lit. I am after my food to take)

(私は、自分の食べ物を取り終えた) ☞ Doi(1998), p.222 より。その際、a'<do “to/for”

xi. **tha**“(there) is” + 屈折 (/活用) 前置詞 (**aig/ag/a**“at”) による所有表現 :

共通ゲール語全体の共有特徴 (2. 1) にも触れた “esse” (ある) 動詞 + 屈折前置詞句による所有構文で、その際、屈折 (/活用) 前置詞、特に **aig** “at” (または **le** “with”) が合わせ用いられる。

⑫ **Tha taigh agam.** (=E. I have a house<lit. (there) is a house at me)

is house af me

☞ Doi(1998), p.222 よりの引用例

(私には、家がある/私は、家を持っている)

ただし、所有者の(同定)表現には、繫辞 is “is” + 屈折(/活用)前置詞 le (“with”) の形式が用いられる。

⑫' Is leat. (=E. It is yours<lit. It is with you) ((それは、)私のです)

is with-you

☞ Doi(1998), p.222 よりの引用例

⑫" Is leis an leabhar. (=E. The book is his/lit<lit. It is with him, the book

is with-him the book (その本は、彼のです)

☞ Doi(1998), p.222 よりの引用例

cf. 他言語の比較例:

Sc.Gael. Tha im agam. (=E. I have a butter with me<lit. Is butter at me)

(私には、バターがある/私は、バターを持っている)

Ir. Tá im agam. (一同上一)

☞ 以下は Doi(1998), p.290 よりの引用例

W. Y mae ymenym gennyf i. (“with me”) (一同上一)

R. U meña máslo.

xii. ’sis “it’s” + 代名詞 e “it” + 強調部分 (S/O) + 関係詞 a “that” + 動詞  
による分裂文 (/混成文) の汎用:

⑬ ’S e cat a thug Iain do Seumas. (=E. It is a cat that John gave to James

it’s it cat that gave John to James <lit. ... that gave John to James)

(ジョンがジェームスに与えたのは、猫です/直接目的語 O の強調)

⑬' ’S e cat a thoirt do Seumas a rinn Iain.

it’s it cat for giving to James that did John

(=E. It is to give a cat to James that John did

<lit. It’s a cat for giving to James that did John)

(ジョンがしたのは、ジェームスに猫を与えたことです/名詞句強調)

バリエントには、’sis “it’s” + ann “(in)to” + 強調部分 (名詞句他) ~がある。

⑬" ’S ann do Seumas a thug Iain an cat.

it’s in to James that gave John the cat

(=E. It is to James that John gave the cat<lit. ...that gave John the cat)

(ジョンが猫を与えたのは、ジェームスにです/間接目的語 O の強調)

cf. 他言語の比較例:

Sc.Gael. Is ise a chunnaic mi. (=E. It is SHE who saw me)

it’s HER that saw me (私を見たのは、彼女だ/彼女が私を見たのだ)

Ir. Is sise a chonaic mé. (一同上一)

☞ 以下は Doi(1998), p.291 よりの引用例

W. Hi am gwelodd. (一同上一) F. C'est elle qui m'a vue.

xiii. “esse” 動詞の2種: 繫辞と存在:

*is* [繫辞]と *tha* [存在]の区別は Sc.Gael.で義務的。

cf. Sp. の *ser* (<\*es) と *estar* (<\*bhe-) の区別。

x iv. 屈折 (/活用) 前置詞[前置詞+人称代名詞]による人称・数表示の汎用 :

⑭ Sc.Gael. leam (私と共に) <le (～と共に) +mi (私/短形)

leam の屈折 (/活用) :

1sg:leam-2sg:leat-3sg:leis/leatha-1pl:leinn-2pl:leibh-3pl:leotha

Sc.Gael.の他の主な屈折前置詞とそれらの屈折 (/活用) は、以下の通りである。

*aige* (“at”) : agam < aig+mi      ☞ 以下、CL(1993), p.183 よりの修正引用例

agam-agad-aige/aice-againn-agaibh-aca

*air* (“on/after”) : orm < air+mi

orm-ort-air/oirre-oirnn-oirbh-orra

*do/dha* (“to/for”) : dhomh < do+mi

dhomh-dhut-dha/dhi-dhuinn-dhuibh-dhàibh

*d(h)e* (“of/off”) : dhìom < d(h)e+mi

dhìom-dhìot-dheth/dhith-dhinn-dhìbh-dhìùbh

*bho* (“from”) : bhuam < bho+mi

bhuam-bhuat-bhuaidh/bhuaipe-bhuainn-bhuaibh-bhuapa

cf. 他言語の比較例 :

G. zum < zu dem : 前置詞+人称代名詞

Cz. doň < do jeho (彼/それまで) oč < o co (何について) : 前置詞+代名詞

x v. (後続名詞の緩音/鼻音化を引き起こす) 定冠詞の存在 :

指示代名詞が起源の *na/an* (ModIr./Sc.Gael. *na/an* < \*sindo/a(その/この)) は、以下のように、名詞に前置し、それと格、数が一致する。ただし、名詞の語頭子音は冠詞の形により、*a/a*なら緩音化を、*an/am*なら鼻音化をそれぞれ引き起こすが、それ以外 (*na*) なら引き起こさない。

⑮ am bàrd (その詩人が) /nom.sg./

a' bhàird (その詩人の) /gen.sg./

air a' bhàird (その詩人に) /dat.sg./

am bàrd (その詩人を) /ac.sg./

a bhàird! (詩人よ!) /voc.sg./

na bàird (その詩人達が) /nom.pl./

nam bàrd (その詩人達の) /gen.pl./

air na bàird (その詩人達に) /dat.pl./

na bàird (その詩人達を) /ac.pl./

a bhàirda! (詩人達よ!) /voc.pl./

cf. 他言語の比較例 :

Ir. an bád (そのボート) an bháid (そのボートの)

na báid (それらのボート/pl.)

an garsúin (その少年) an gharsúin (その少年の)

na garsúin (それらの少年たち/pl.)

an t-uisce (その水) <uisce/鼻音化/

an bhean (その女性) <bean の/口蓋音化/

### 3. スコットランド・ゲール語の類型：VSO 言語への傾向？

いわゆる Greenberg の語順類型論の立場に立つと、(付加要素の Ad を除き) 文を構成する主要な 3 要素つまり S：主語、O：目的語、V：動詞または P：述語の配列の組合せにより現存する主要な語順タイプの抽出が可能となる。頻度順では、SOV タイプ>SVO タイプ>VSO タイプと考えられている。しかし、この理論では、S と O が名詞の場合のみで、代名詞の場合は議論されていない。ケルト語を見れば、大陸ケルト語の Gaul. (ゴール語) や C.Ib. (ケルト・イベリア語) は SOV タイプで、ModIr. (現代アイルランド語) や Sc.Gael. (スコットランド・ゲール語) が VSO タイプとなるが、OIr. (古期アイルランド語) では V(P)タイプが最も高い頻度となることが古文獻 (例えば 4 大グロースなど) の分析<sup>\*3</sup> から明らかされた。そこでは、以下の歴史的変化のプロセスが提起され、それが OIr. から分岐し (隣接する E(英語)との言語接触の結果、分析性が高まった) Sc.Gael. にも確認可能であることが推定される。

Ir. (アイルランド語) /Sc.Gael. (スコットランド・ゲール語) の語順タイプの推移：  
ModIr./ModGael. 代名詞 S および代名詞 O の出現つまり (特に人称) 代名詞の統語的

独立の結果一貫した V-S-O 文法語順

<MidIr. /MidGael. 多様な語順バリエーションの発生による “ゆれ”

<OIr. 3 種の語順タイプの併存

V(P)-S-O タイプ (S が名詞かつ O が名詞の場合：V(P)SO) ☞ Doi(1988)の分類より  
：/稀で低頻度/

V(P)-O タイプ (O が(接中)代名詞の場合：V(P)S) ☞ (接中) 代名詞目的語の動詞  
：/低頻度/ (S が動詞人称語尾(φ)の場合：V(P)O) 直前位置への義務的挿入

V(P)タイプ (O が(接中)代名詞かつ S が φ つまり動詞人称語尾の場合：V(P))  
：/頻度は高く多用/ ☞ (接中) 代名詞による抱合語的構造で類型論的には抱合タイプの一

次に、Kurzová による SAE 言語 (標準均一欧州語) vs. 非 SAE 言語に基づく C (中心域) vs. P (周辺域) 類型論<sup>\*4</sup> (一種の地域言語類型論) の立場に立てば、語順以外にも多様な言語現象、文法現象のタイプ分布の設定が可能となる。具体的には、Sc.Gael (スコットランド・ゲール語) における特異な文法現象、つまり P (周辺域) に属する現象としては、以下の 4 つの周辺タイプ (P) を確認することが可能となる。

(1) 呼格 (voc.) 形の残存 (a' (~よ!) + voc. 名詞!) : P (⇔C : 呼格の主格への合流)

(2) 総合的未来形 (“未来” / “現在習慣”) の文法化 (-aidh) : P. (⇔C : 分析的未來形)

⑩ Gabhaidh e (=E. He will take/takes) (彼は、取るだろう/取ります)

cf. tha a' dol a' + 動名詞 (=E. be going to) (~しようとしている) / 近未來形/

téid (行く) の/動名詞形/

☞ ⑩" を参照。英語との言語接触の結果か？

(3) 総合的 (非人称/脱動作主的) 受動形の汎用 (分析受動形の限定併用) (-eadh) : P



(⇔C : 分析的受動形)

⑰ **Dhùineadh iad.** (=E. One closed them.) (彼らは/それらは、閉められた)

dhùin (閉める) の/過去・非人称・受動形/

(<人称能動形 : Dhùin iad. (=E. They closed.) (彼らは/それらは、閉めた)

dhùin (閉める) の/人称・過去受・動形/

(⇔分析受動形 : Bha iad air an dùnadh(=E. lit. They were on their closing))

**Rinneadh e.** (=E. One did it) (それは、なされた/作られた)

dèan (する/作る) の/過去・非人称・受動形/

cf. **Thàinig orm.** (=E.lit. (It) came upon me) ☞ ‘Involvement’ の一種と見なされる。

thig (来る) の/過去・非人称・受動形/ (私は、仕方なかった<(それは、)私にやって来た)

(4) 関係小詞 **a** の文法化 : P (⇔C : 疑問詞起源の関係代名詞)

⑱ **am fear a chunaic mi** (=E. the man who saw me/whom I saw)

関係小詞/不変化/ (私を見かけた/私が見かけた男)

**am fear ris an robh mi a bruidhinn** (=E. the man to whom I was speaking)

(私が話していた男)

(注) ※1 (語派別) 言語名の略称は、下記の通りで、以下それに準拠する。

ゴイデリック語 : Ir.アイルランド語/OIr.古期アイルランド語/Sc.Gael.スコットランド・ゲール語/MidIr.中世アイルランド語/MidGael.中世(スコットランド・)ゲール語/ModIr.現代アイルランド語/ModGael.現代(スコットランド・)ゲール語/M.マン島語 ; プリソニック語 : W.ウェールズ語/MidW.中世ウェールズ語/Cor.コーンウォール語/Br.ブルトン語 ; 大陸ケルト語 : Cel.Ib.ケルト・イベリア語/Gaul.ゴール語 ; その他の言語 : E.英語/F.フランス語/G.ドイツ語/R.ロシア語/Sp.スペイン語/Cz.チェコ語/Lat.ラテン語/IE.印欧(祖)語/J.日本語

※2 下線は比較対照部分を、☞ 記号は注記を、+<sup>1</sup>と+<sup>2</sup>は後続要素の緩音化および鼻音化を、それぞれ示す。以下、同様。

※3 本城(2016)の4大グロースに関する分析結果を参照。

※4 Kurzová(1997)において提起された類型論。

#### 4. 結論

(スコットランド・)ゲール語の諸例観察の結果、以下の傾向的特徴が抽出された。

- i. 音声的特徴としては、共通ゲール語に見られる緩音化/鼻音化/口蓋化以外に、母音交替も音韻的特徴をなす。
- ii. 形態統語的特徴としては、分析タイプの形容詞同等級形の存在、**tha**“(there) is”+前置詞+動名詞による多様なアスペクト形式(進行形、**tha a' dol a**+動名詞=E.be going toによる近未来形、完了)の発達、**tha**“(there) is”+屈折(/活用)前置詞(**aiglagla**“at”)による所有表現、**'s is**“it's”+**e**“it”+強調部分(S/O)+関係

詞 *a* “that” + 動詞による分裂文の汎用、*is* [繫辞]と *tha* [存在]の区別、屈折 (/活用) 前置詞 [前置詞 + 人称代名詞]による人称・数表示の汎用、(後続名詞の緩音/鼻音化を引き起こす) 定冠詞の存在が、それぞれ観察される。

- iii. 類型的特徴としては、Ir.と同様の語順タイプ推移、つまり一貫した V-S-O 文法語順 (ModGael.) </人称代名詞の統語的独立/>高頻度 V(P)タイプとバリエントの併存 (OIr.) に見られる分析化、C (中心域) vs.P (周辺域) 類型論からは、4つの周辺タイプ (P)、すなわち呼格 (voc.) 形の残存、総合的未来形の文法化 (-*aidh*)、総合的受動形 (-*eadh*) の汎用、関係小詞 *a* の文法化が、それぞれ確認される。

参考文献：

- Bičovský, J.(2005): *Úvod do vývoje Keltských jazyků (An Introduction to the Development of Celtic Languages)*, FF UK:Praha.
- Calder, G.(1923): *A Gaelic grammar containing the parts of speech and the general principles of phonology and etymology*, Alex MacLaren & Sons:Glasgow.
- CL: The Celtic Languages* (Ed.by M.J. Ball, Publ. by Routledge:London, 2000)
- Dineen, Rev.P. (1904): *Faclóir Gaeilge agus béarla (An Irish-English Dictionary)*, David Nutt:London.
- Doi, T.(1998) : 「アイルランド語」「スコットランド・ゲール語」「島嶼ケルト語」『言語学大辞典セレクション：ヨーロッパの言語』三省堂：東京
- Encyklopédia jazykovedy (Encyclopedia of Linguistic)*, Obzor:Bratislava, 1993.
- Hirunuma, T.(1981): “The Characteristics of the Keltic Languages,” *Studia Celtica Japonica No.16* (Ed. by J. Yoshioka) , The Celtic Society of Japan.
- 本城二郎 2014 : 「ケルト語の諸特徴と類型—アイルランド語における音声的特徴と形態統語的特徴を中心として—」西日本言語学会第 44 回研究発表会ハンドアウト.
- 本城二郎 2016 : 「古期アイルランド語の諸特徴と類型—4 大グロース (分ち書き) に見られる形態統語的特徴と類型的特徴を中心として—」 *NIDABA No.45*.
- Jackson, K.H.(1951): “Common Gaelic” , *Proceedings of the British Academy* 37, London.
- Kurzová, H.(1997): “Morphosyntactic processes in Europe,” *Proceedings of LP (Ed.by B. Palek)*, Charles University Press:Prague.
- Pedersen, H. et al.(1974): *A Concise Comparative Celtic Grammar*, Vandenhoeck and Ruprecht:Göttingen.
- Russell, P.(1995): *An Introduction to the Celtic Languages*, Longman:London.
- Yoshioka, J.(1971): “On Celtic Languages (1)”, *Studia Celtica Japonica No1*.